

MfG_J_OLd_Nagaoka_town_shorted

1. 長岡まちなか歴史散歩
2. 長岡駅前の今昔を歩く
3. 江戸時代長岡町の地図
4. 蠟座稲荷と内川
5. 長岡名所 東山油田

6. ネットで拾った昔の写真です

[http://www.e-net.city.nagaoka.niigata.jp/elibrary/ayumi/
nagaoka/1910.html](http://www.e-net.city.nagaoka.niigata.jp/elibrary/ayumi/nagaoka/1910.html)

[http://www.e-net.city.nagaoka.niigata.jp/elibrary/ayumi/
nagaoka/photo1906_01.html](http://www.e-net.city.nagaoka.niigata.jp/elibrary/ayumi/nagaoka/photo1906_01.html)

主なもの

新聞社、学校
庁舎、病院
銀行

1. 長岡まちなか歴史散歩 20161105

ニ之丸

本丸御殿の補助的な施設として使用された。

ニ之丸の幅は、今の国道沿いに南北57間半(約104メートル)、堀の幅は、16間(約29メートル) ありました。広さはおよそ2500坪でした。

この中で、御能が演じられ、庶民(領内各組の庄屋、村役人)も見ることができた。

ニ之丸櫓跡の土留杭

長岡城の面影を伝えていた土塁は昭和33年厚生会館の開館により取り崩されたが、土留の杭の様子が見られる。

長岡公会堂(ニの丸跡)

大正15年(1926)表町1の旅館業大野甚松氏の寄付により、建てられた。

鉄筋コンクリート2階建て(一部3階) 1階こは、市で一番大きな食堂があった。1500人収容の大集会場があり、音楽・講演・展覧会などが催され市民に親しまれた。

崇徳館

長岡藩校で、文化5年(1808)に9代藩主牧野忠精により開設された。

門生約200名で学べる人は、藩士の子弟に限られた。

有隣亭

9代藩主牧野忠精が、藩校の隣に作った別邸で、家臣や、学者、文化人達と歓談したり風流を楽しんだ。殿町は、殿さまの住居があったところから名づけられた。

互尊文庫(現長岡グランドホテル付近)

大正6年(1917)野本恭八郎氏の寄付によ建てられた。洋風木造という当時としては大変モダンな建物だった、蔵書の種類や数、入館者数など日本有数の図書館となり、長岡市の文化の発展、市民の生涯学習の後押しに貢献した。

稲垣平助の屋敷

長岡藩の筆頭家老(2000石)で、北越戊辰戦争のときには新政府への恭順を主張して河井継之助などの主戦派と対立した。

杉本鉞子は平助の6女で「武士の娘」を書いた作家。

コロンビア大学で日本人初の講師になった。 本は、全米でベストセラーになった。

長岡病院(現ガトウ専科)

北越戊辰戦争後、疫病がはやり、庶民の陳情から長岡会社病院が設立された。その後、内科・外科・眼科・産婦人科が開設され、大正元年に本館新築となった。

そして昭和6年に赤十字社に寄付し長岡赤十字病院になった。

町口門

門は、表町の町家に接する城門なので、町口門といわれました。

他に、大事門、神田口門、千手口門など17門があった。

長岡城の門はほとんど、攻守に便利なカギ型道路を兼ねた枡形門でした。

この町口門は特に巨大だった。

米百俵の碑(国漢学校跡)

慶応4年(1868)の北越戊辰戦争で、長岡の城下は焦土と化した。
長岡を再興するには、人材を育てることが大切と、小林虎三郎は、三根山藩から送られてきた米百俵を教材費に充て国漢学校を集めた。

長岡市役所

大正10年(1921) ドイツ建築様式を取り入れ、県下初の鉄筋コンクリート2階建てのモダンな庁舎ができた。
長岡空襲で内部が焼けたが、補修し、昭和30年まで市役所として活用された。

女紅場跡 …… 旧阪之上小学校跡

三島億次郎は県から補助金を引き出し、明治9年女紅場を設立し、
婦女子の職業教育を行った。
養蚕織物の技術を取得し、生産・初歩的な国語、算数などを学ばせた。
寄宿生80名・通学生50名
明治22年に解散して土地、建物を長岡市立阪之上小学校に寄付した。

本丸御殿

東西78メートル、南北98メートルの敷地に数棟の平屋をつないだ建物群で、5つのブロックに分かれていた。
(1)表座敷、(2)家老の執務室、(3)藩主の生活場所、(4)女性の住む大奥、
(5)台所

本丸御三階

長岡城のシンボルで、御殿の西北にあり、堀の水面から23メートルの高さがあり
城下の町全体が見渡された。

長岡駅(長岡城の本丸)

信越線は明治31年私鉄の北越鉄道として開通した。その後、明治40年
国鉄に移管され、信越本線になった。上越線は昭和6年開通。
(記念行事として博覧会が、現在の水道公園を会場として開催された)
大正10年から駅前が整備され、道路も18メートルに拡幅され、目抜き通りを
大手通りと名付けた。

江戸時代、牧野家によってつくられた長岡の街は、北越戊辰戦争で壊滅的な
打撃を受けました。

先人たちの努力により、明治・大正時代には文化都市として生まれ変わりました。
その後、長岡空襲で、町の八割を焼失するという、再び壊滅的な打撃を
受けました。

2018年、長岡は開府400年を迎えました。(長岡観光ボランティアガイドの会)

2. 長岡駅前の今昔を歩く

戊辰戦争後の復興

江戸時代の長岡は牧野家七万四千余石、信濃川を船道とする流通の要として活気に満ちた城下町でした。しかし、戊辰戦争では政府軍との俄烈な戦場として、長岡城も城下町も焼き尽くされることになります。

戊辰戦争後は、米百俵の故事にみるごとく、市民をあげて復興に立上がります。信濃川では早くも川蒸気が登場するなど、船運は交通の大動脈として機能しはじめます。

明治の半ばには石油ブームに沸き鉄道が大きく注目されるようになります。そして、明治三十一年に長岡城の本丸跡に長岡駅は開業しました。

当時、城址は遊覧場と呼ばれ、市民いこいの公園として親しまれていましたが、この開業によって長岡市の中心拠点としての役割をふられます。

上越線の開通

昭和六年九月、待ちにまった上越線の開通によって長岡市は大きく飛躍します。清水トンネルの掘削には、実に九年の歳月がかかりました。しかし、この全通によって長岡から上野の間が約八時間、急行で五時間四十分で行けるようになり、日本海側の要衝として一躍脚光を浴びることになります。

また、開通イベントとして「上越線全通記念博覧会」が四十一日間にわたって開催され、六十三万人もの入場者で賑わい、当時の人々の喜びと期待を伝えています。

第二次大戦からの復興

戊辰戦争からの復興を果たしたものの、第二次大戦による焼夷弾によって、長岡市はふたたび焼け野原になってしまいます。大手通りの長岡戦災資料館には、焦土と化したジオラマが当時の凄まじさを伝えています。

現在の長岡駅は上越新幹線の開通にともない、昭和五十五年に新装され今日に至りますが、長岡藩の旗印である「五問はしご」をイメージして設計されました。

長岡駅は再度の復興のシンボルとして、市民の熱意によって育まれてて来たことが分かります。

長岡駅前の史跡について

長岡駅前は再度の被災によって往時をしのぶ史跡建築物は殆ど残っていません。しかし、ようやく石碑類の整備が進み、わずかながら先人の足跡をたどれるようになってきました。

公会堂跡地 稻荷大明神、長岡城址、二の丸跡の碑

米百俵、国漢学校の碑

まいまい姫、 大手大橋までの道路拡幅でわずかに移動。

寺・神社・歴史と観光

司馬遼太郎の「峠」の河井継之助や、山本有三の戯曲「米百俵」の小林虎三郎、また三島健二郎らが、幕末から明治時代にかけて長岡の進退再建をかけて次々に登場します。

長岡城の開祖堀直よりの母ぎみ妙泉院が眠る正覚寺、山本五十六や詩人堀口大学などの墓がある長興寺、そして牧野家の菩提寺でもあり、幕末の風雲児・河井継之助、この河井に向って非戦を説いた三島億二郎らが眠る栄涼寺の三寺は、幕末の史跡コースとして多くの人たちが訪れています。

発行. JR長岡駅／長岡市城内町2－794－4

長岡観光・コンベンション協会／

長岡市大手通2－5大手通分室内 Tel. 0258－32－1187

制作: 月刊マイスキップ編集部

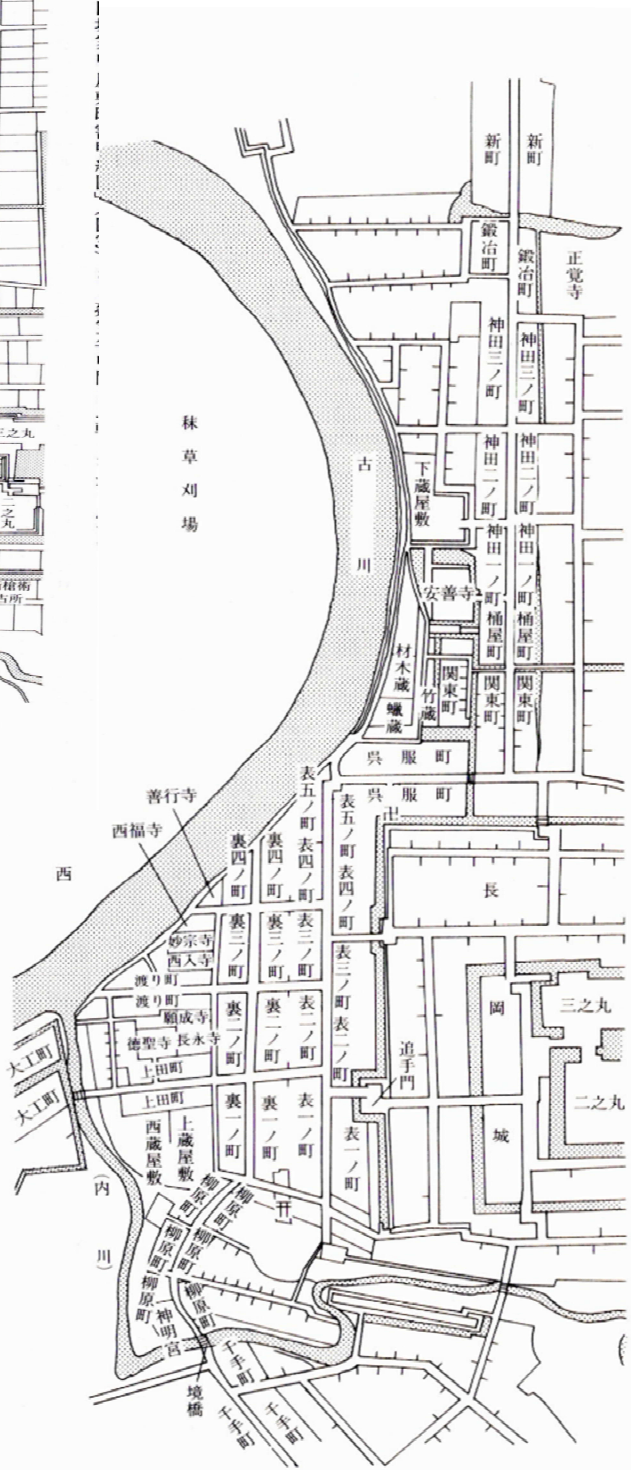
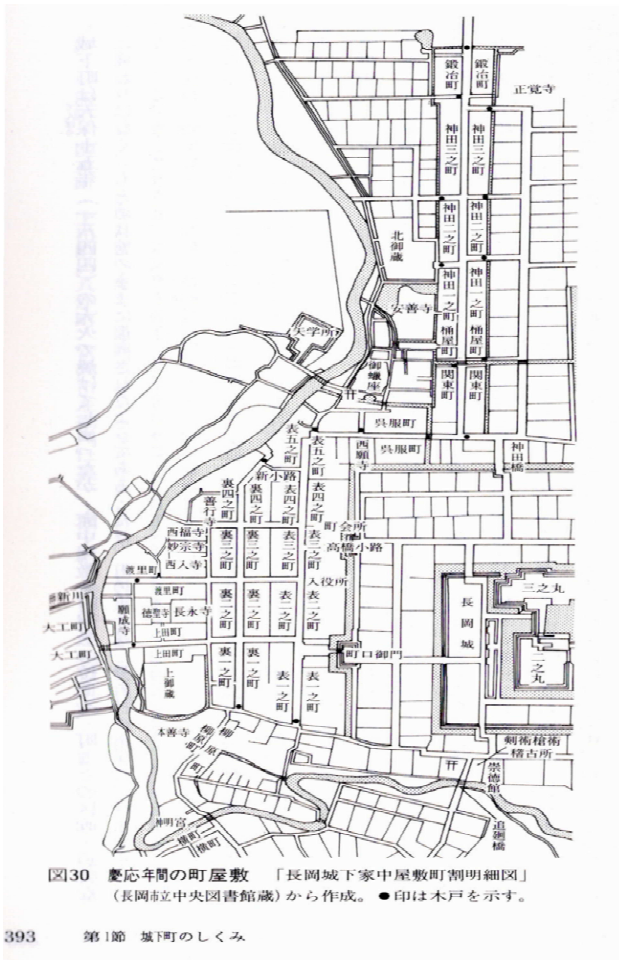
明治31年開業時の長岡停車場

上越線全通記念博覧会の

パンフレットとスタンプ

3. 江戸時代長岡町の地図

長岡市史 上巻



4. 蠟座稲荷と内川

蠟座稲荷 呉服町二丁目

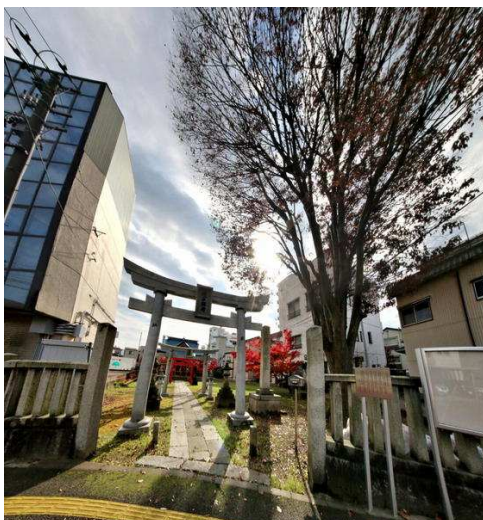
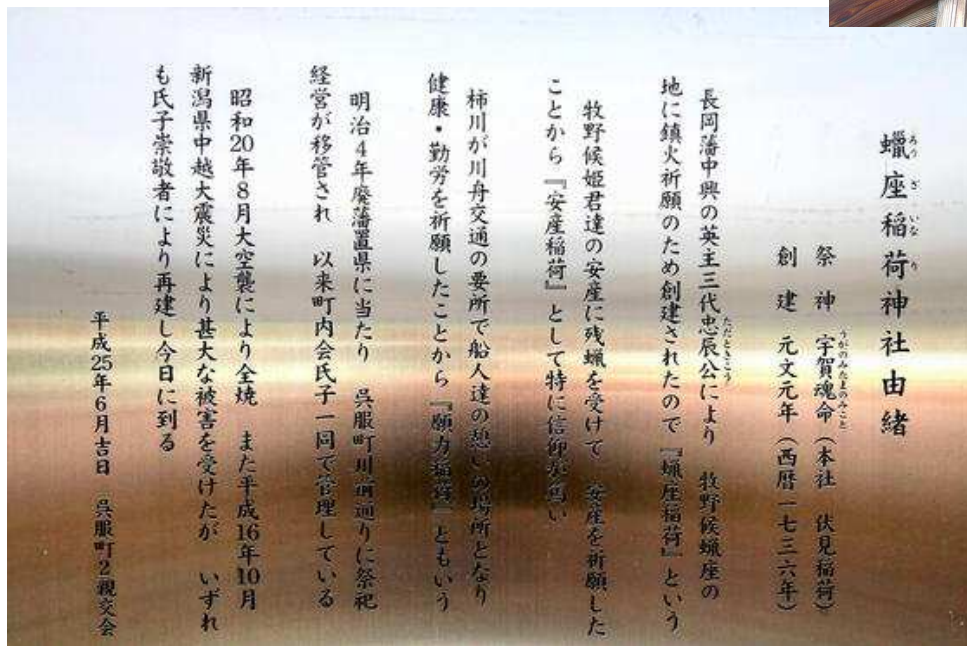
長岡市呉服町の蠟座稲荷は、江戸時代長岡藩の蠟座の地に、
火災、水害からの守りを目的に創建されたものです。

中興の三代忠辰公のとき、稲荷を創建。

牧野候姫君の安産祈願。

柿川河渡の舟びとの健康・勤労祈願から、

眼力稲荷としても知られている。





http://www.hrr.mlit.go.jp/shinano/shinanogawa_info/53tugi/20/2002.htm

蠟座稻荷初午の図(呉服町)

呉服町河戸の荷揚げの様子、河戸での作業の姿を知る唯一の手がかりとなるものである。傍に藩の専売品の蠟を扱う役所があった。

(所蔵・長岡市立中央図書館)

水量の豊かな信濃川を利用し、藩をバックに株仲間で組織されたのが長岡船道。水運の実権を握り、年貢や一搬商品の輸送・保管で利益をあげた。

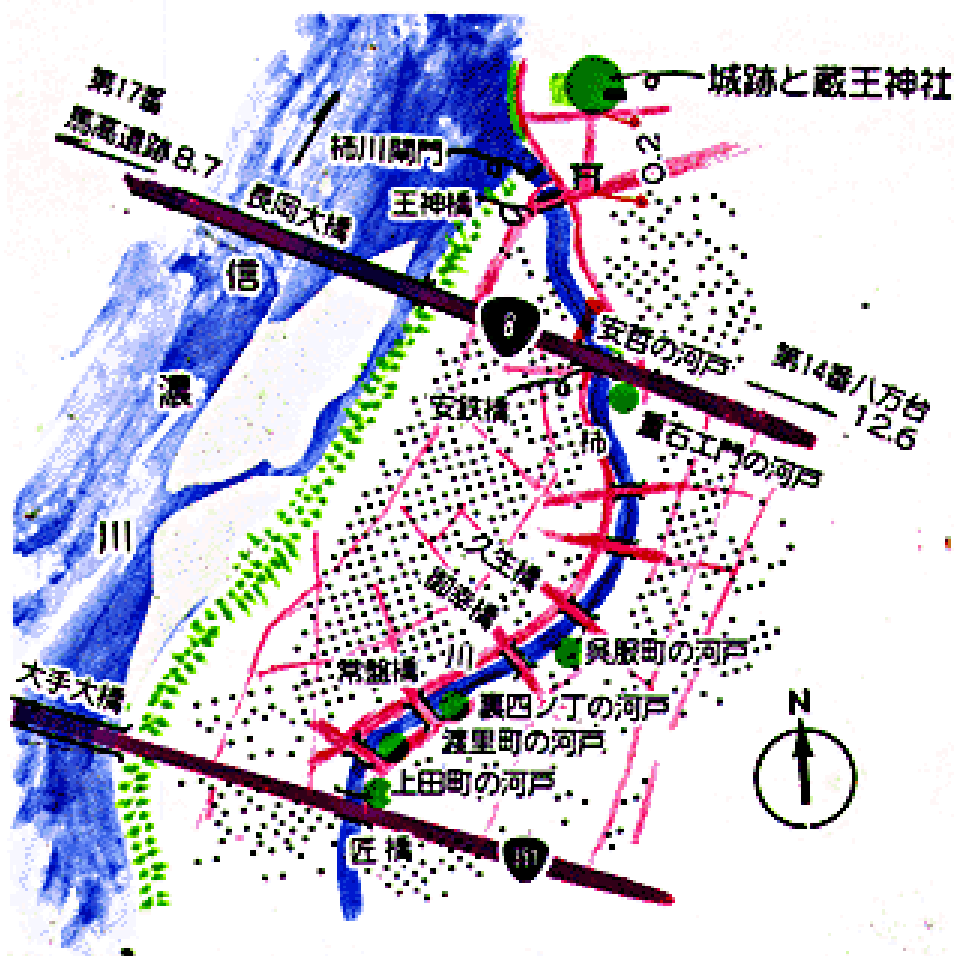
掘直奇は、信濃川を往来する船の荷物を取り扱わせる定法をつくり、牧野氏はさらに番所を設置。上り下りの荷物は全部船着場に止めて積替えを行い、新潟へ魚沼地方へと運んだ。

長岡船道は江戸時代のなかごろには川船180艘を所有。新潟、長岡の間を毎日通ったというほどの繁栄ぶりであった。新潟で積み込まれた上り荷は、江戸時代の最盛期には北海道や東北沿岸でとれたサケ・マス・数の子・天草・切昆布・身欠にしん・佐渡のイカなど塩魚類。中には遠く瀬戸内の塩、土佐の鰯節、熊野のクジラのほかに越中笠、畳表、阿波の藍玉、京都の宇治茶など多種類に及んだ。内川河戸と呼ぶ船着場は内川(柿川)上流の草生津から内川出口の蔵王の間に置かれた。安政年間(1854～59)には安哲・重右衛門・呉服町・裏四ノ町・渡里町・上田町の六カ所で、船着場ごとに接岸する船が決められていた。

水運の特権を握っていた長岡船道は慶応3年(1866)に廃止。その後明治になって川蒸気とよばれた汽船が長岡・新潟間を活躍した。白帆に風をはらませた信濃川の風物詩も、今は見るできない。



久生橋は、表町小の東南の、
柿川にかかる橋





洩海川は信濃国境の豪雪地帯から流れてきますので春遅くまで水量豊かです。
太田川は山古志村の山を水源とする、長岡地域では最も豪雪でこれまた遅くまで
水量の有る川。

つまり、柿川の上流で洩海川と太田川が合流して信濃川の水量は増え、
いつまでも豊かなのです。

今の柿川を見ても解るように、緩やかな流れで信濃川の入江に流れ込みます。
舟付場を作るにはもってこい。

そこで、堀氏が長岡に入ってきたときに、蔵王に城を造りました。

これで、越後の水運を支配できる。

次に牧野氏が入ってきたときに考え直しました。

蔵王は信濃川に近すぎて洪水も怖い。

また、幾つも船着き場、河戸をつくり大いに商いを広げたい。

柿川の上流に城を移し、安全な城下町を作り柿川沿いにいくつも河戸を造ろう。
実際に地図のように6つの河戸が出来ました。

5. 長岡名所 東山油田

http://meiji-meisho.at.webry.info/200904/article_2.html

「日本書紀」には天智7年(668年)、「越国、燃ユル土、燃ユル水を献ズ」という記述があり、古くから新潟県では石油やアスファルト状の土があることが認識されていたようです。

明治期に入ると、西洋から石油ランプが輸入されて、日本にエネルギー革命がおこります。和蠟燭と比較すると明るさは8倍程で、夜の生活も随分と変化したようです。石油ランプは明治10年頃から爆発的に普及をはじめ、横浜港等における石油輸入量も急増していきます。

そんななか、新潟県では石油が採掘できることが知られたため、一攫千金をねらったオイルラッシュが沸き起こります。長岡市では、明治6年、「長野石炭油会社」が試掘を始めますが、本格的には明治21年に長岡市宮路に「石動油坑会社」や「北越石油会社」が創業して、石油採掘の一大ブームが訪れます。油井が発見されたのは東部丘陵地帯で、「東山油田」と呼ばれました。現在の国道351号線「新・榎トンネル」の真上あたりとなります。

明治30年代には300社以上の石油会社が設立されましたが、なかでも明治26年に開業した「宝田石油」は日本を代表する石油会社へと成長していきます。

一方で明治21年、新潟県石地村(現・柏崎市)に「日本石油」が創業します。明治24年には尼瀬村(現・出雲崎町)で海上油田開発に成功し、これもまた日本を代表する石油会社へと発展し、その後両社とも合従連衡によって規模の拡大を図っていくことになります。

明治34年の記録によると、東山油田においては、宝田石油、日本石油、蔵王石油、大平石油など七社が代表的な採掘会社となっていました。当時の東山油田は、機械掘り155坑、手掘り112坑を数え、産油量は5万2千キロリットルに達します。このお陰で、長岡の町は石油の町、相場の町として空前の景気に湧きかえります。

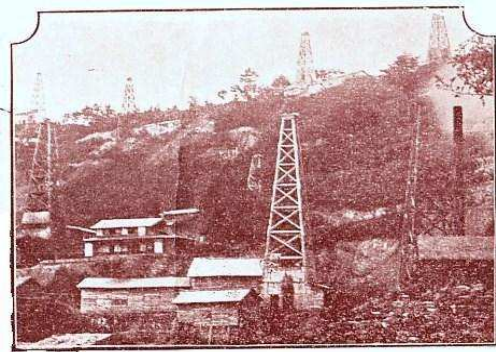
しかし、採油のピークは明治38年頃までで、産出量は下降線を辿っていきます。そこで、当時業界一位の日本石油と二位の宝田石油は、大正10年に大合併して、東京市麹町区に本社を置く「日本石油」となりました。その後、平成14年には三菱石油を吸収する形で、現在の「新日本石油」へとつながっていく訳です。

現在の東山油田は採油が終わっており、栄枯盛衰、油井櫓が確認できるのは2基だけで、赤錆た状態で放置されていました。

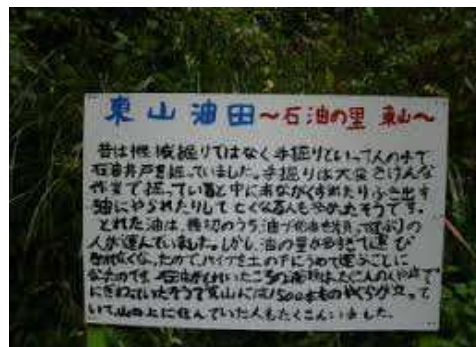
場所は、長岡市浦瀬町腐沢と呼ばれるところで、地名の「腐沢」が示すとおり、沢沿いに放棄された設備が点在し、沢には僅かな油が浮いている状態でした。その沢を辿っていくと「旧・榎トンネル」があり、トンネル手前で脇道を登っていくと油井櫓に出会います。「立入禁止」「火気厳禁」という標識がかつて油田であったことを唯一示していました。

オイルラッシュの到来とともに、長岡では石油を掘る機械や器具の製造・修理業が必要となり、機械工業が発達したそうです。その中で、日本石油の一部門として発展したのが「新潟鉄工所」です。国産初のディーゼルエンジンを開発するなどしましたが、平成13年に清算され、現在は「新潟原動機」にわずかにその名前が引き継がれました。

越佐新聞 付録「長岡 東山油田坑場」(大正期)



長岡東山石油坑場





6. ネットで拾った昔の写真です

<http://www.e-net.city.nagaoka.niigata.jp/elibrary/ayumi/nagaoka/1910.html>

http://www.e-net.city.nagaoka.niigata.jp/elibrary/ayumi/nagaoka/photo1906_01.html

新聞社、学校

庁舎、病院

銀行

北越新報社、新潟県立工業学校、表町小学校、互尊文庫、旧長岡高等工業学校、科学工業博物館
阪之上国民学校

長岡の近代建築群－明治・大正・昭和－／その2／北越新報社

北越新報社／明治42年(1909年)坂之上町2丁目

・当時、県下第一の新聞社(越佐新聞と長岡日報の両者が
合併して北越新報が生まれる)

・木造3階建

・戦災で焼失

現在の長岡商工会議所の位置に建っていました。

時計塔とエントランス上部のベランダが印象的で、当時はおそらく
この時計塔が街のランドマークになっていたことと思われます。

(写真:「ふるさと 長岡のあゆみ／長岡市役所」より)



長岡の近代建築群－明治・大正・昭和－／その4／新潟県立工業学校
新潟県立工業学校／明治44年(1911年)／東千手町

- ・染織科・機械科の授業が行われたほか、応用化学科が増設された。
- ・大正10年に新潟県立長岡工業学校と改称。
- ・昭和15年には西千手町(幸町2丁目)に移転。
- ・昭和23年に新潟県立長岡工業高等学校と改称。

写真は大正3年に起きた洪水の時の様子だそうです。
ファサードは門柱と相まって左右対称性を強調した意匠。
中央のエントランスと思われる部分の上部は洋小屋トラスになっています
から、主体構造はおそらく木造2階建で小屋組みは木造トラスだと思います。
(写真:「長岡今昔写真帖／郷土出版」より)



表町小学校／大正5年(1916年)

- ・木造2階建
- ・昭和14年まで使用。

現在の互尊文庫附近にあったと思われます。
2階はベランダが周囲に張り巡らされているように見えます。
(写真:「長岡今昔写真帖／郷土出版」より)



互尊文庫／大正7年(1918年)／東坂之上町1丁目(現・長岡グランドホテル附近)

- ・木造2階建、書庫は煉瓦造3階建
- ・1階～事務室、児童閲覧室、新聞雑誌室
- ・2階～普通閲覧室、婦人閲覧室、特別閲覧室
- ・旧刈羽郡小国町出身の野本恭八郎の寄付により建設。
- ・戦災で焼失

開館当時、蔵書36000冊を有し、全国でも五指に入る有名な市立図書館だったそうです。(写真:「新潟県の100年・消えた町並み／新潟日報事業社」より)



昭和23年(1948)

互尊文庫の再建

互尊文庫は、昭和20年8月1日の長岡空襲で蔵書の全てを焼失しました。昭和23年、市内の繊維商の内藤伝吉が米百俵の故事を思い、大口の寄付を申し出ました。寄付は再三にわたり、総額115万円となり、明治文庫内に互尊文庫(本館木造2階建て、書庫コンクリート製3階建て)が新設されました。

旧長岡高等工業学校(新潟大工学部)／大正13年(1924年)／四郎丸町(現・学校町)

- ・戦災を免れる。
 - ・戦後、新潟大工学部となる。
- 現在の中央図書館附近です。

工業の発展を願う長岡市は、明治40年代以降、高等工業学校の誘致に取り組みました。その結果、ようやく大正9年(1920)に設置が内定しました。文部省は敷地を四郎丸町に決め、その敷地18,000坪(約6万㎡)並びに建設費は県と市が寄付しました。この年の4月12日、112人の新入生を迎え、第1回入学式が行われました。



科学工業博物館／大正15年(1926年)／四郎丸町(現・学校町)

- ・RC造2階建
- ・長岡市が旧長岡高等工業学校に寄贈
- ・昭和3年には化学工業博覧会、昭和4年には電気展覧会が開催された。
- ・昭和24年、積雪科学館になり、昭和42年閉館。
- ・スレンダーなサッシ。その上には装飾が見えます

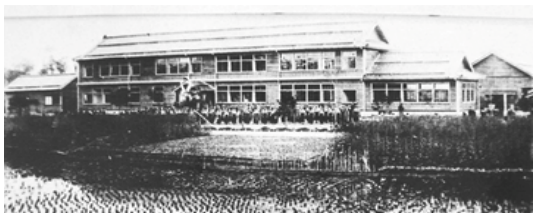




昭和16年(1941)

阪之上国民学校

明治7年に第三中学区公立阪之上校として国漢学校校舎に創立。大正9年に改築工事中に火災となりました。その後、昭和9年に玉蔵院町に改築し移転しましたが、昭和20年の長岡空襲で焼失してしまいました。



明治40年(1907)

長岡市立高等女学校

明治36年に開校した古志郡立長岡高等女学校はこの年3月に、古志郡立から長岡市立となり、名称も「長岡市立高等女学校」と変わりました。明治40年には商業科を設置。明治45年には普通科4学級、商業兼修科4学級、定員400人の学校となりました。

昭和23年に新潟県立長岡女子高等学校、昭和25年に新潟県立第二長岡高等学校、昭和42年に新潟県立長岡大手高校と改称し、現在に至っています。

市庁舎、長岡病院、長岡市公会堂、商業会議所

長岡市庁舎／大正10年(1921年)／坂之上町2丁目

・RC造2階建

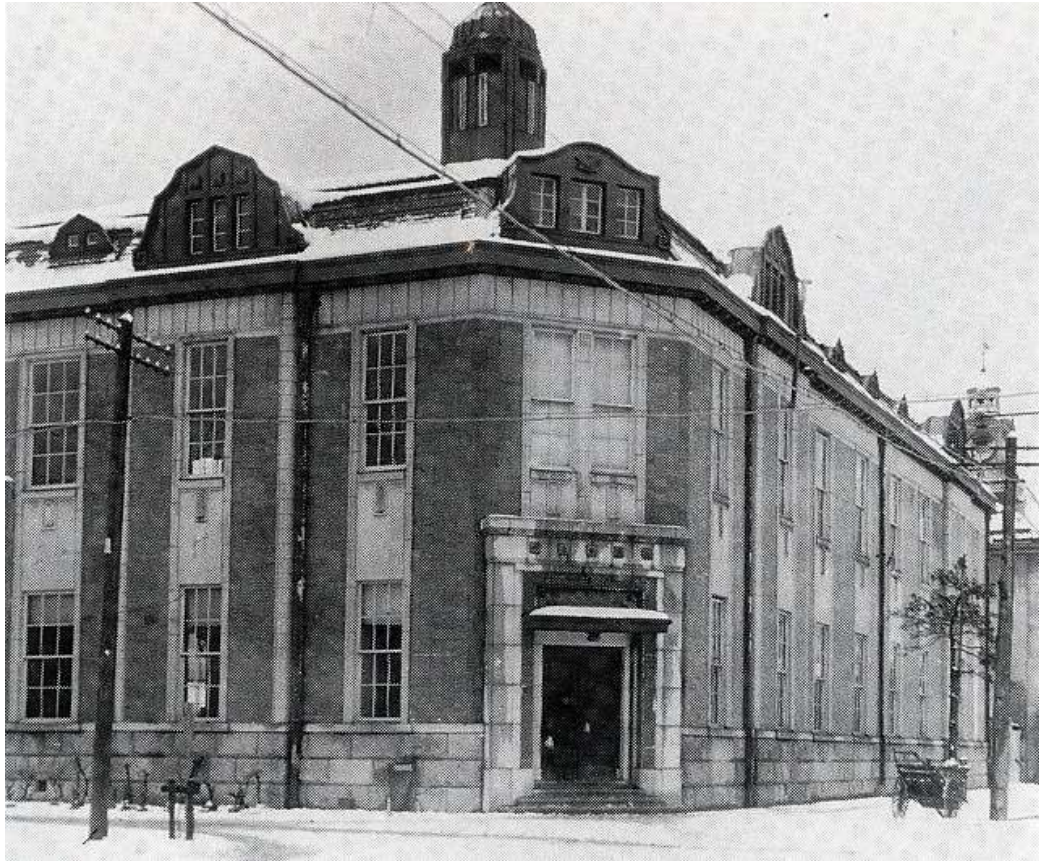
・設計:片岡謙吉(東京帝国大学2期生)

新潟県初のRC造の市庁舎だったそうです。

先日閉店した大和デパートの位置に建っていました。

戦災後も改装され使用していましたが、柳原町新庁舎建設により取り壊されました。

大手通りを挟んで向かいには長岡病院が建ち、風格のある街並みを形成していました。(写真:「ふるさと長岡のあゆみ／長岡市役所」より)



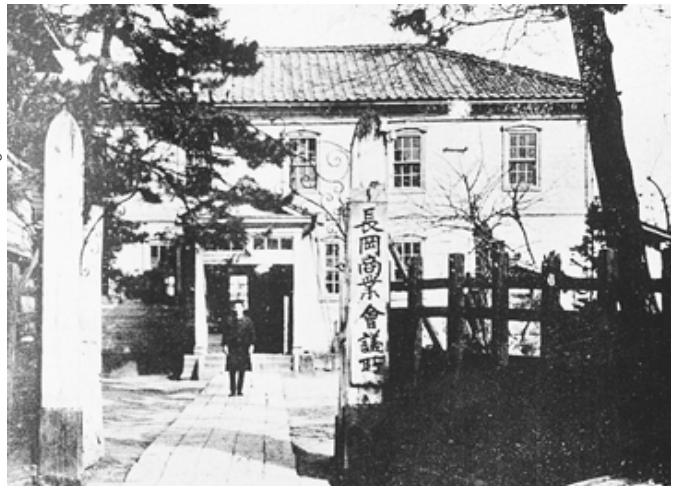
7月11日には、竣工式が
挙行され、塔上高く据え
付けられたサイレンが毎
日市民に正確な正午を
報せることとなりました。



長岡病院／大正元年(1912年)／大手通
 ・長岡赤十字病院の前身
 大手通り、現在の大和デパート向かいにありました。
 こちらもシンメトリーで威風堂々とした佇まいです。
 (写真:「長岡今昔写真帖／郷土出版」より)



明治38年(1905)3月7日に設立された長岡商業会議所が大正14年、創立20周年を迎えました。記念式は、5月5日午前10時から坂ノ上町1丁目の会議所入口右側広場に設けられた式場で、来賓・現議員・前議員が参加して、行われました。



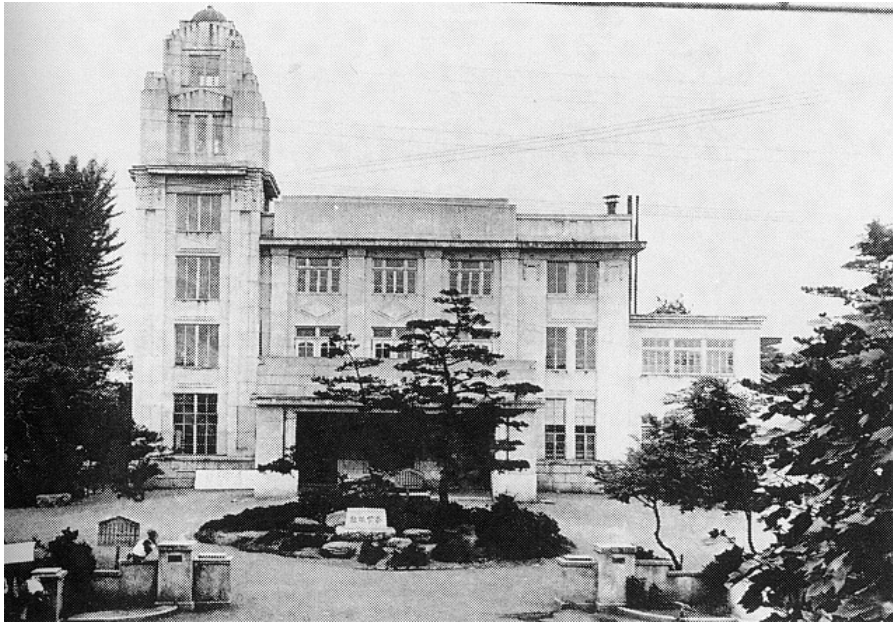
明治39年(1906) 長岡市役所
 市制施行の際の市庁舎は、坂ノ上町の旧長岡町役場に置かれました。その後、老朽化にともない、豊島市長は大正9年に新庁舎の建設に着工(現大和長岡店の場所)。翌年7月には、県下最初の鉄筋コンクリート2階建ての庁舎が完成しました。



長岡市公会堂／大正15年(1926年)／現・シティーホール(旧厚生会館)の位置

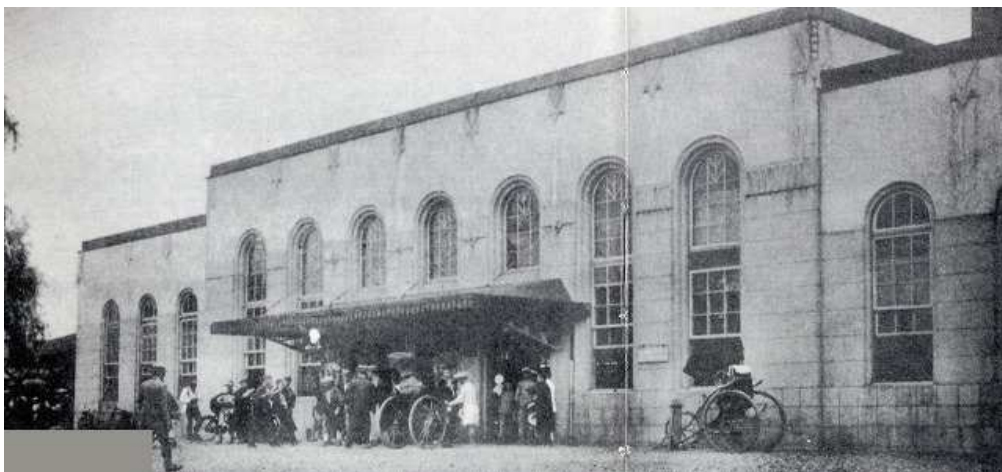
- RC造3階建
- 1階に食堂、2階にホール(1500人収容)
- 来賓をもてなす格好の迎賓館で、長岡のシンボリック的存在だったそうです。
- 日本の旅館王といわれた大野屋・大野甚松の寄付により建設。
- 公会堂建設により長岡城旧二の丸内壕がなくなった。
- 戦災で残ったが廃墟と化してしまった。
- 旧厚生会館建設により昭和33年に取り壊されました。

(写真:「ふるさと 長岡のあゆみ／長岡市役所」より)



長岡駅舎／大正15年(1926年)

- RC造平屋建
 - 長岡駅の開業は明治31年
 - 新幹線の開業に伴い昭和49年に姿を消しました。
- 高校生の頃は冬期間電車通学で利用した、懐かしい駅舎です。



昭和9年(1934)

長岡赤十字病院

明治5年に坂ノ上町に発足した長岡会社病院が前身(翌年に長岡病院となる)。昭和6年に長岡赤十字病院となり、この年に神明町(日赤2丁目ほか)に新築されました。10年に結核病棟、伝染病棟などができ県内有数の病院となりました。



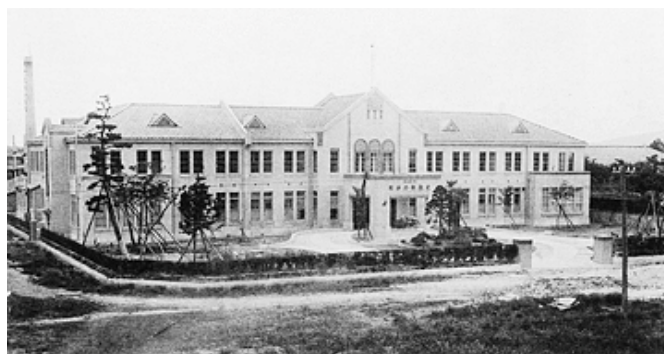
昭和9年(1934)

中越医療組合病院

(現中央総合病院)

新栄町(今の福住2丁目)の埋立地に開院しました。

新栄町(現福住2丁目)の埋立地に中越医療組合病院(現中央総合病院)が開院(昭和10年7月9日新築竣工式、7月10日開院式)



昭和21年(1946)

市役所庁舎竣工

昭和20年8月1日の長岡空襲で市庁舎は大きな被害を受け、翌日には隣接する北越製紙本社の建物を借用して仮事務所としました。6日には今朝白町の長岡国民学校高等科(今の阪之上小学校の場所)に移転しました。そして昭和21年5月10日に復旧した大手通りの市庁舎に戻りました。

昭和33年(1958)

厚生会館竣工

厚生会館は、厚生年金還元融資制度を使って出来た体育施設の第1号。鉄筋3階建て、総床面積5,841㎡で、総工費1億3,000万円でした。講演会、展覧会、音楽会などの使用も考え、音響効果と館内の色彩・照明に十分な配慮がされていました。





昭和34年(1959)
大野記念館完成
長岡市公会堂を寄附した
故大野甚松の偉業を長く
しのぶため、厚生会館の
隣に建設。当初は1階が
食堂、2階が画廊として
利用されました。その後、
老朽化などのため、平
成15年9月に取り壊さ
れました

六十九銀行本館、長岡銀行本店、長岡貯蓄銀行

<http://mawada.exblog.jp/12254474/>

六十九銀行本館／大正5年(1916年)／表三ノ町、表町通

- ・鉄骨＋煉瓦造2階建
- ・施工：清水組
- ・現・北越銀行の前身。
- ・戦災により、外周壁を残すのみだったが、戦災後も外観を原型に復して使用された。
- ・昭和41年取り壊される。

現在の第四銀行表町支店の斜向いにありました。

角地でコーナーに高くそびえる塔は、まさに街のランドマーク的存在。

当時の長岡で代表的なモダン建築だったそうです。

ポーチ廻りは歩道部にかなり張り出して、アーチの開口部に囲まれた半屋外スペースになっています。



長岡銀行本店／明治36年(1903年)／裏二之町(現・本町2丁目)

・北越銀行の前身

・昭和17年に六十九銀行と合併し昭和23年に北越銀行と
なったのだそうです。

寄棟の蔵づくり。手前の雁木は建設当時にできたものか
わかりませんが、建物の和と雁木の洋がぶつかりあう
ハイブリッドな意匠です。

雁木の上には手摺がついており、ヴェランダになっているようです。

(写真:「ふるさとの思い出 写真集 明治・大正・昭和 長岡／内山喜助編／図書刊行会」より)



『第六十九国立銀行本店(明治30年12月2日新築)』
銀行の設立には三島億二郎、岸宇吉らが尽力している。設立当
初は近くの民家を借りて営業していたという。この写真はその後
代の建物。

長岡貯蓄銀行／昭和元年(1926年)／坂之上町1丁目、大手通
 ・北越銀行の前身
 ・現在の北越銀行本店の位置にありました。
 ・右が長岡貯蓄銀行。マッシブな造形とレンガタイルの外壁。
 エントランス廻りは重量感のある列柱群で構成されています。
 左は当時の長岡市庁舎(現在の旧大和デパートの位置)。
 (写真:「新潟県の100年・消えた町並み／新潟日報事業社」より)



長岡郵便局／大正3年(1914年)／坂之上町
 ・煉瓦造
 ・戦災で焼失
 連続するアーチの開口部が印象的です
 (写真:「ふるさと長岡のあゆみ／長岡市役所」より)

